
人類メガネ化計画

K Y Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類メガネ化計画

【Nコード】

N8813I

【作者名】

KYY

【あらすじ】

山川中学校に通う仲良し4人組みが、とある人物のせいで事件に巻き込まれる。あのメガネをかけた集団はいつたい？！

笑いあり、涙ありのバラエティに富んだストーリー！。

1章 脱出

「君の事が好きなんだ・・・。」

「ごめん・・・私ほかに好きな人がいるの。」

「俺じゃ駄目なのか？」

「ごめんね・・・。」

「俺はこんなに愛しているのに。」

「無理って言ってるでしょ！」

「だけど僕は君の事が好きなんだ。」

「しつこい！私メガネかけてる人嫌いなんだよね！じゃあね！」

「まっつてくれよ！」

ガンツ・・・

顔面にひじ鉄をくらった。その勢いでメガネが割れてしまった。目にガラスの破片が入り、片方の目が見えなくなってしまった。

ここで私は必ず復讐することを誓った。

「隼人ー早く起きなさい！遅刻するわよ！」
うるせえなくそババア・・・と心の中でつぶやきながら制服に着替えた。

(ピンポン)

「ほら、加奈ちゃんが来たわよ。」

「ああすぐ行くよ。」

急いで支度をした。もちろん朝飯を食う暇はない。

「じゃあ行ってくるわ。」

「隼人〜遅いよ〜」

「おう、わりいわりい。」

俺の名前は中村隼人。山川中学校に通っている中学生だ。実は加奈には内緒だが……痔だ。

「また寝坊？」

「別にいいだろ」

隣にいるこいつは高倉加奈。俺と同じ中学校に通っている幼馴染だ。頭はいいけど少しドジな所もある。

学校に着き、3・2のドアを開くと、さわやかなあいさつが聞こえた。

「おはよー」「はろー」

こいつらは俺と加奈の親友、福田真由と大浦健だ。健は俺らの中でマイペースでムードメーカー的な存在だ。そして、これは俺しか知らないが、口内炎がしやすい。真由は美人だが、時には毒舌だ。ちなみに二人はバカップルだ。言っとくけど俺と加奈は付き合っていないぞ。

ハキーンコーンカーンコーン }

・・・

「起きてよ隼人。次は隼人の大好きな体育だよ。」

「・・・今何時間目？」

「4時間目だよ。」

「あれ？今日は早いな。」

「ずっと寝てたからだよ。ばーか。」と、真由が答えた。

「よし！じゃあ体育いくか。いこうぜ健。」

健は顔を伏せている。多分口内炎の位置を確認しているのだろう。

「早くいこうぜ。」

「・・・確認完了！」

やはり確認してたらしい。

「がんばってね？健??？」

「任せとけて！真由????？」

「今日は100m走のタイムを計ります。」

「おっしや！俺の俊足のスピードを見せてやるぜ！」

・・・

「隼人、何秒だった？」

「俺？ジャスト12秒！健は？」

「（速っ！）・・・遅いな。俺は3秒だったぜ！」
「お前はアラレちゃんか！？まあそんな事はどうでもいいから早く教室に戻るっぜ」

教室のドアを開けると、いい香りが漂ってきた。

「ゲツ・・・今日の給食はお前の大好きなカレーだぞ」
「マジ！？のぶちゃん？」

この先生の名前は田中信幸。生徒からの人気も高くいい先生だが、残念ながら息がくさい。ちなみに今の不快な音は、ゲツプだ。通常時の3倍の威力がある。

「なあ隼人、うんこ味のカレーと、カレー味のうんこどっちが好き？」

「変な事いわないでよ、け〜んちゃん？」
真由が突然現れて、健に抱きついた。

（・・・っ！持病の痔がああああ・・・）
これも秘密だが、俺はイライラすると持病の痔が悪化するのだ。

「どしたの？隼人？」
「いや、なんでもない・・・。」

給食を食い終わった俺は、スクバからボラギノールを取りだし、俊敏な速さでトイレにかけこんだ。この時の俺は忍者の如く、素早い動きである。

ボラギノールを刺し終えた俺は、満面の笑みを浮かべてトイレから
でると、満面の笑みの教頭が、そこに立っていた。

「このメガネを君にかけさせてあげよう」と、突然言ってきた。

「いや・・・遠慮しときます。」

「ほら、早くかけなさい！」

気味が悪くなった俺は、教頭を無視して階段を二段飛ばしで駆け登
り、教室に戻った。

俺はさつき遭った出来事をみんなに話したが、真面目には聞いてく
れなかった。

だが俺は何か心が引つかかっていた。

そのことについて考えていると、のぶちゃんが「おい、またテスト
0点だったぞ。ほら」と言ってテストをわたしてきた。

俺はふざけてその答案用紙をくしゃくしゃにして窓の外に投げた。

6

「お前今の答案用紙、外に行って拾ってこいよ。」

俺は珍しく怒ったのぶちゃんに対して思わずひるんでしまった。

仕方なく拾いにいこうとすると、加奈達が「うちらもいくよ」と言
つてついてきた。

外に出ると、冷たい風が吹いてきた。もう冬なのかとしみじみと感
じる。

「冷たい風でふとんがふつとんだ。」健が言った。

「・・・コイツのおかげでもっと寒くなった。」

「あ！あそこに紙があるよ！」

それはエ口本の表紙だった。・・・
と、健が言った。

さらに心が寒くなるギャグをスルーして、その紙を拾いにいった。

それは当たり前だが俺の答案用紙だった。拾おうと紙に手を触れようとしたが、その直前に風に乗って近くの森の方へ飛んでいってしまった。

「あ！ちくしょうタイミング悪っ！」

「しかも森の方に行っちゃったね。」

その森は、広くていつでも薄暗く、かくれんぼにはもってこいの場所だが、

その森は隼人にとって嫌な思い出のある場所だった。

それは二年前、中一になって3ヶ月がたったある日のことだった。

学校が終わり、その日は痔がやばかったので、早く帰ろうとした。靴を履くと足に違和感を感じるので、確認していると、手紙が入っていた。それは明らかにラブレターだった。内容は

「今日は隼人君に大事な話があるの。放課後すぐにいつもの森にきてね？ by・K」

K!?!?!これはもしかして加奈?!と、俺は思った。

一気に痔の痛みが回復し、喜んで森に行った。

しかしいたのは加奈ではなく、クラス1のブスでデブで気色悪い山寺くるみという女だった。

「うふふふ 隼人くん??」

あまりのキモさにめまいがしてきた。それにストレスでめまいがするほどの痔の痛みがきた。

「あのね、隼人君。」

(うざい!そして痔が痛い!)

「実はね、入学式の日からあなたの虜だったの?」

薄々感づいてはいたが、最悪の事態だ。

「もう我慢できない？あなたの事が大好き！好きで好きでたまらない？」

「俺だって我慢できねーよ！あ！．．．いっいや、そういう事じゃなくて．．．」

「え．．．？隼人君も私のことが．．．？」

「違う！！違うんだあああ！！！！」

「ついに隼人君が私だけのものになったわーーーー！！！！！！？」

そう言っつて山寺は猛スピードで帰っていった。

「どうしたの？隼人？」

「い、いや、なんでもない。」

加奈の一言で目が覚めた。過去の思い出を思い出してもっと寒くなつた。

まああの過去はなんとか話し合いで解決しクラスも変わったが、今も遠目から視線を感じる事がある。

「さっさと拾いにいこうぜ。」健が言った。

意外と近くにあった答案用紙を拾い、もうすぐで5時間目が始まる時間なので、走って学校に戻った。

玄関にはのぶちゃんが待っていてくれた。「遅かったな。今日の5時間目が、校内放送で変更になって体育館での全校集会に変わった

いものの、早く逃げ出したさそうな顔だった。

ドーーーーー

突然体育館のドアが破壊された。廊下は狭いので、大勢では襲ってこないが、4人ほどが前に進みでてきた。

「ここは俺がくい止める！早く行け！」のぶちゃんが必死で叫んだ。

「ありがとう……のぶちゃん。」

俺は覚悟を決めて、三人に「走れ！」と叫んだ。

学校からでる寸前、後ろを振り返ると、のぶちゃんが多くのメガネをかけた人と、対等以上に戦っていた。のぶちゃんを信じて、学校をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8813i/>

人類メガネ化計画

2010年10月11日20時23分発行